

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370578

研究課題名(和文) 第二言語としての日本語の語用論的能力の習得に関する縦断的研究

研究課題名(英文) The Development of Interlanguage Pragmatics on Learners of Japanese in Second Language Setting

研究代表者

ボイクマン 総子(梶本総子)(BEUCKMANN, Fusako)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：50370995

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では初級初期の日本語学習者(L2)10名の語用論的発達を13ヶ月に渡りロールプレイによって縦断的に観察し、依頼と謝罪に関わるストラテジーとスピーチレベルの発達過程を分析した。学習環境要因のインタビュー調査も行った。同時に日本語母語話者(NS)20名のデータも比較対照として分析した。

結果、L2とNSでは依頼と謝罪で異なるストラテジーがある、L2の依頼補助部に大きな変化はないが直接的な依頼が減り間接的な依頼が増える、スピーチレベルは主レベルでは対人関係に応じ変化が見られるがサブレベルはNSのような変化がない、NSとの接触の頻度が相手に応じた語用論的能力の使用に影響を与えることがわかった。

研究成果の概要(英文)：This study's goal is to explore the pragmatic development of ten beginning learners of Japanese over 13-month in second language setting using role-play data. This study focuses strategies on request and apology, and speech levels. Learning factors were examined through interview. Data from twenty native Japanese speakers were also analyzed.

As a result, there were notable differences in distribution of strategies between L2 and NS on request and apology. However, development of the use of supportive moves on request was not observed. On request the findings revealed a decreased frequency of direct strategies and an increased use of indirect strategies. On apology the use of strategy develops as proficiency of the language increases. The learners demonstrated an increasing ability to use the main speech levels, however, no learners acquired the use of the sub-speech level. This study showed that greater command of pragmatic knowledge was achieved by exposure to the target language.

研究分野：日本語教育

キーワード：中間言語語用論 第二言語習得 依頼 謝罪 スピーチレベル ポライトネス ストラテジー

1. 研究開始当初の背景

第二言語習得に関する語用論の研究(中間言語語用論)は、異文化間語用論研究の知見や研究手法を基にして発展してきた。異文化間語用論研究とは、異なる文化的背景を持つ言語話者による発話行為遂行の相違を解明することを目的とした研究である。

この異文化間語用論研究が直接に外国語教育への応用を目的として行われる場合もある。その場合、目標言語の母語話者(L1)がある発話行為を遂行する際に使用する語用論的な特徴と、第二言語学習者(L2)の目標言語における語用論的能力とを比較し、その習得が困難な側面や母語話者の規範的な使用とのずれ、語用論的転移の様相を明らかにし、言語教育への示唆を得ることが研究課題となる。

日本語教育における日本語学習者の語用論の研究も、こういった異文化間語用論の研究手法や研究成果に依拠し発展してきたため、ある特定の学習段階における学習者の言語使用に見られる語用論的な特徴を解明する研究がほとんどであり、その研究動向は近年においても変化がない。また、分析対象とする習得段階は、主として中級から上級について調査したものがほとんどで、初級初期や初級中期をも分析対象に組み入れた研究は、管見の限り見当たらない。

さらに、これらの研究は特定の母語話者、及び、レベルの学習者の中間言語を分析対象とし、語用論的知識の使用に関わる特徴を実証的に検証した研究ではあるが、学習者の語用論的能力の発達過程を研究の対象とはしていない。

日本語教育において語用論的能力の発達過程を横断的に実証した研究には、遠山(2005, 2006)があるのみである。縦断研究に関しては、第二言語環境と外国語学習環境を比較対照とした研究を除くと、日本語に限らず、どの言語学習者の習得に関しても研究数は非常に少なく、日本語の習得研究は Sawyer(1992)等、ごく僅かである。

このようなことから、日本語教育においては中間言語語用論の研究、特に縦断的な研究は未だ発展途上にあった。

2. 研究の目的

本研究においては、日本語学習者の初級の初期段階から 13 ヶ月にわたる習得過程を縦断的に調査分析することで、以下の 3 点を研究の目的とした。(1) 特定の発話行為-依頼・謝罪-を遂行するための言語的な手段、すなわち、語用言語学(pragmalinguistics)の発達過程を明らかにする、(2) 上下や親疎などの社会的な文脈における適切な言語使用、すなわち、社会語用論(sociolinguistics)の使用の発達について依頼・謝罪のスピーチレベルに焦点をあて、

明らかにする、(3) 日本語母語話者との接触の頻度や授業外での目標言語学習時間などの学習環境要因を半構造化インタビューで調査することにより、各 L2 の習得状況との関連を解明する。

3. 研究の方法

(1) 調査の形式

前述の研究目的の(1)(2)については、調査対象者が場面に応じて瞬時に判断した発話を抽出することを目的に、話の結末が決まったクローズド・ロールプレイの形式を用いて 3 ヶ月の間隔をあけ 5 回、調査を行った。調査時期を以下、M1、M4、M7、M10、M13 と記す。

研究目的(3)については、日本語学習が好きか、難しいか、何が好きで何が難しいか、授業の課題以外で「読む・聞く・話す・書く」の 4 技能の学習を週に何時間程度、どのような方法で行っているか、をインタビューで尋ねた。

(2) 調査対象者

調査対象者は、都内のある大学に在籍する L2 10 名で、年齢は 18-20 才、L1 は中国語、英語、韓国語、ベトナム語、ベンガル語のいずれかであった。性別は男性 4 名、女性 6 名で調査開始時は、全員 0-2 ヶ月未満の日本語学習歴であった。日本滞在歴については、なしが 7 名、数日の旅行が 3 名だった。L2 は全員日本語初級を総合的に学ぶ教科書を第 1 課から学習した。このような背景から、本研究の調査対象の L2 は、調査開始時は初級のごく初期であったと判断できる。また、比較対照として、同じ大学に在籍する同年代(19-21 歳)の 20 名(男性 10 名、女性 10 名)の日本人学生(NS)にも同様のクローズド・ロールプレイによる調査を行った。

(3) 場面と調査手順

依頼内容は、先行研究で使用されている場面を援用し、かつ、大学生が遭遇しそうな内容を想定し、(1)その場ですぐ借りることができる「ペン」を借りる、(2)その場ですぐ借りることができない高額の専門の「本」を借りる、(3)隣に住む住人に「音楽」の音量を下げてもらおうという 3 種の内容にした。

謝罪内容は、(1)喫茶店で隣に座っている人に「コーヒー」をこぼす、(2)借りていた高額の「本」を電車でなくすという 2 種の内容であった。

会話の対話者は、先行研究を参照し、社会的距離である上下関係と心理的距離である親疎関係を統制し、高名で年齢が高い「教授」(上・疎)、親しい年上の「先輩」(上・親)、「親友」(同等・親)とした。

上述の内容ごとに、3 人の会話の相手と対話するという場面を設定した。場面は英語で書かれた状況を示すカードをランダムに提示した。NS には日本語で書かれた同様の内容のロールカードを提示した。

4. 研究成果

(1) 依頼の主依頼部の直接性

依頼の語用言語学の発達過程を知る指標の一つとして「主依頼部(Head Act)」の発話の「直接性」を分析する方法がある。本研究では直接性を表1に示すコーディングにより分析した。

メインカテゴリー	サブカテゴリー
1. 直接	(1) 依頼のモダリティ (2) 行動の宣言 (3) 願望
2. 慣習的間接	(4) 質問による前置き (5) 条件つき感謝や喜び
3. 非慣習的間接	(6) ヒント

それぞれの会話例は「(1)貸して(2)借りるよ(3)貸してほしいんですけど(4)借りてもいい?(5)貸してもらえたらありがたいけど(6)音が大きいんですけど」などである。

結果、図1で示すように、L2はNSよりも、より直接性の高い言語形式を用いていることがわかる。

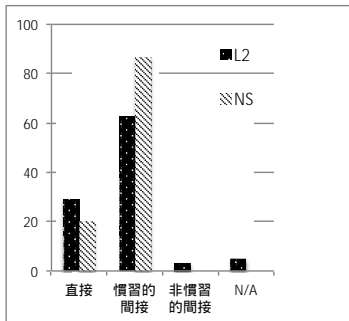


図1-1 親友

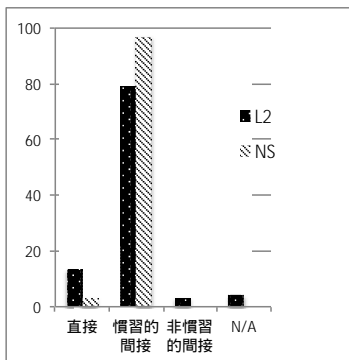


図1-2 先輩

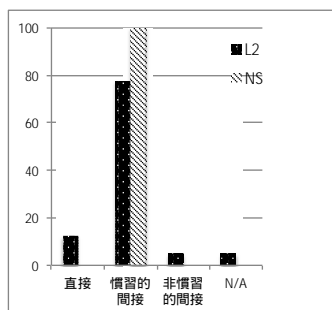


図1-3 教授

(2) 依頼補助部のストラテジー

「依頼補助部(supportive moves)」のカテゴリーと発話例は次の通りである。A) Preparatory ペン持つてる?、B) Getting a pre-commitment お願いがあるんだけど、C) Grounder - Indirect 試験があるんだけど、D)Grounder - Direct 持ってないんだ、E) Justification 試験で必要で、F) Disclaimer だめだったらいいんだけど、G) Imposition minimizer もしよかったら、H) Apology すみませんが、I) Gratitude ありがとう、J) Minimizing the degree of burden すぐ返します、K) Promise of reward おごるよ、L) Request marker よろしくお願います。

結果として、ほとんどの依頼内容と会話相手で、NSのほうがL1よりも、H) ApologyとK) Request markerを多用する、「ペン」では先輩に対してもL2はC)Grounder-Directをより多く用いる、「本」では先輩と教授に対しL2はPreparatoryとGrounder - IndirectをNSより多く用いること、NSは「本」で、親友に対しJ) Minimizing the degree of burdenを、教授に対しG) Imposition minimizerを有意に使用すること統計的に明らかになった。

一方、L2の依頼補助部を詳細に分析すると、L1が異なっているにも関わらず、調査対象者の10名のL2で依頼補助部の使用に統計的に有意な差は見られなかった。加えて、時間的経過(M1-M13)による依頼補助部の使用頻度の変化も見られなかった。

このことから、本研究のデータを見る限り、依頼補助部のような発話行為の際に「何を言うのか」は時間の経過によってそれほど変化せず、依頼の直接性のように「どのように言うのか」という語用論言語学については発達が見られたと言える。このことは、L2の言語能力の上達との関わりがあると思われる。

(3) 謝罪のストラテジー

謝罪のストラテジーのカテゴリー、及び、サブカテゴリーと発話例は以下の通りである。A) Pre-sequence: A-1 Mentioning the purpose of conversation 謝らなきゃいけないことがあって/A-2 Mentioning a topic この前借りた日本経済という本だけど、B) Expression of apology: B-1 Apology before explanation or taking on responsibility ごめん/B-2 Apology on the spot or after explanation or taking on responsibility、C) Explanation or account コーヒーがこぼれちゃって、D) Taking on responsibility: D-1 Explicit self-blame わたしのせい/D-2 Admission of facts but not of responsibility この前借りた日本経済の本なくしちゃったんだけど/D-3 Lack of intent なくすつもりはなかった/D-4: Expression of embarrassment どうしよう、E)

Expressing concern for the recipient 大丈夫?、F) Minimizing the degree of offence まあ大丈夫だろ、G) Offer of repair: G-1 Attempt of repair おしぼり取ってくる / G-2 Asking how to make repairs to the recipient どうしたらいい? / G-3 Asking the necessity of repair to the recipient その本まだ使うかな / G-4 Offer of repair クリーニング代払います / G-5 Confirming the recipient who had indicated no need to repair 本当? / G-6 Appeaser 今度なんかおごるよ、H) Appreciation for the recipients' forgiveness : H-1 Appreciation or relief for recipients' acceptance of apology よかった / H-2 Remark on recipients' forgiveness 優しくよかった / H-3 Apologetic expression for recipients' forgiveness でもなんか悪いな、I) Promise of forbearance (今後このようなことが起きないように心掛けます)。

結果、L1とNSでは、複雑な状況説明を要しないストラテジーについては、ストラテジー使用に大きな差がなかった。一方、統計的に有意な相違が見られたのは、「コーヒー」では、C) Explanation or account という説明を要する状況、及び、G) Offer の G-2、G-4、G-5 で、NS のほうがその使用頻度が高かった。「本」では、A-2 Mentioning a topic、D-2 Admission of facts but not of responsibility、E) Expressing concern for the recipient、及び、G) Offer の G-2 と G-5 で NS の使用が L2 よりも多かった。逆に L2 のほうが NS よりも使用頻度が高かったのは G-1 Attempt of repair だった。

全体的に、NS のほうが L2 よりもストラテジーの使用が多く見られたが、それは言語能力との関わりが考えられる。結論付けるにはさらに継続的な縦断研究が必要であるものの、L2 は言語的に発達段階にあるため、言おうとしても言えなかった表現があった可能性は大いにある。また、ストラテジーの個人差も存在し、特に、悪気がなかったことを示す D-3 Lack of intent は、1名の L2 が多用していた。

時間の経過に伴ったストラテジーの数量的な変化は、特に、会話者とのやりとりを要する B-1 Apology before explanation or taking on responsibility、G-2 Asking how to make repairs to the recipient、及び、G-5 Confirming the recipient who had indicated no need to repair において、使用の増加がみられた。会話のやりとりは、初級の初期段階ではまだ困難で、言語能力の向上や接触の頻度と共に発達していったと言えそうである。

(4) 謝罪の表現

NS は相手に応じた謝罪表現 (IFIDs: Illocutionary force indication devices) だけでなく、発話行為の内容の深刻さに応じ

ても、その言語表現を変えていた (例: ごめん、ごめんなさい、申し訳ない、など)。

一方、L2 は、時間の経過に伴い、場面の深刻さに応じた IFIDs の使い分けは観察されなかったものの、会話相手に応じた表現の使い分けを行うようになっていった。これは、全 10 名の L2 において観察された。

日本語学習者においては、対話者の上下・親疎関係に関わる言語使用の使い分けのほうに、発話行為の内容の深刻さよりも、より意識されやすいと言える。

(5) スピーチレベルとサブ・スピーチレベル

ポライトネスに関わる日本語の言語表現として、「スピーチレベル」が長く研究対象とされてきた。スピーチレベルの研究においては、普通体 (Plain)、丁寧体 (desu/masu)、敬語使用 (honorifics) の 3 レベルで議論されることが多かったが、三牧 (2013) は、より詳細にスピーチレベルを分析するためには上述の主要 3 スピーチレベルに加え、その下にサブ・スピーチレベルを置く必要性を提唱している。本研究においても、三牧 (2013) に従い、主要 3 スピーチレベルの下にサブ・スピーチレベルを設定した。

具体的には、本研究では、1) 最上位のスピーチレベルである敬語使用 (例「お借りできませんか」) の下のサブ・スピーチレベルとしては終助詞「ねえ」を追加した「お借りできませんかねえ」と終助詞「か」の省略 (「お借りできません?」)、2) 中位のスピーチレベルである丁寧体も同様にその下のサブ・スピーチレベルとして、終助詞「ねえ」の追加と疑問詞「か」の省略 (例「貸してもらってもいいですかね / 貸してもらえます?」)、3) 最下位のスピーチレベルである普通体のサブレベルとしては、終助詞の追加や縮約形の使用 (例「貸してくれなんないかなあ」) によってそのサブ・スピーチレベルを認定した。

結果、依頼内容における主要スピーチレベルは図 2、対話者に応じた主要スピーチレベルは図 3 で示す通りとなった。

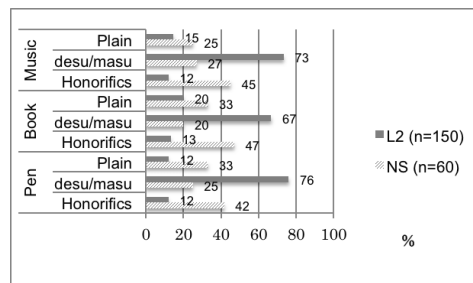


図 2 依頼内容におけるスピーチレベル

図 2 に見られるように、依頼内容の違いによるスピーチレベルに関しては NS も L2 も特に大きな違いは観察されなかった。一方、図 3 にみられるように、対話者に応じた主要ス

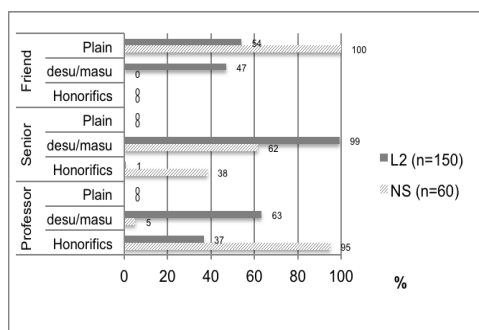


図3 対話者に応じた主要スピーチレベル

スピーチレベルについては、親友ではNSは普通体を用い、先輩には丁寧体もしくは敬語、教授には圧倒的に敬語を用いている。

一方、時間の経過で見ると、L2はNS同様に、親友には丁寧体を使用する頻度が高くなり、教授に対しては敬語を使用する頻度が高くなっていった。しかしながら、先輩に敬語を使用するL2はわずか1名がM13において1度使用しただけで、他のL2は丁寧体のままであった。

サブレベルについて観察すると、NSは、親しい先輩には、丁寧体のスピーチレベル(使用割合はNS全体の25%)だけではなく、親しさの表明のため、丁寧体の下位のスピーチレベルも(NSの20%)使用していた。同様に、親友に対しても、単に普通体を使用するだけではなく(NSの62%)、普通体の下位のスピーチレベルを38%のNSが使用していた。

それに対して、下位のサブ・スピーチレベルを使用するL2は皆無だった。サブ・スピーチレベルは、親しさや親密さを表明する言語的なストラテジーとして有効であるため、語用論的能力の一つとして、このような affective attitude を指標する言語的な表現の積極的な教授も言語教育においては欠かせないと言える。

本研究の分析から、L2は、親友には普通体、先輩には丁寧体(desu/masu)、教授には丁寧体もしくは敬語を使用するというルールを持っていることが示唆された。大学の部活動やサークルで先輩と交流する割合が高いL2とそうではないL2において相違はなく、同様の傾向が見られた。

L2にインタビューでその理由を尋ねてみると、先輩には敬意を表すために普通体を使用するのは失礼であると思うが、敬語を使用すると距離を感じるため使用しないと答えたL2が少なからずいた。対話者との距離を取ったり縮めたりする言語的手段としては、敬語使用の有無だけではなく、4.5のサブ・スピーチレベルで見たように、親しさや親密さを表明する言語的な指標もある。しかしながら、これらの affective attitude を指標する言語的な表現は、日本語教育においては、例えば総合教科書などで学習項目として取り立てて教授される項目でないため、日本語教員が意識的に教授する必要がある。

(6) 接触頻度

第二言語環境のL2は、外国語環境のL2よりも目標言語の接触が高いことは容易に想定できるが、第二言語環境であっても目標言語にそれほど接触することなく過ごすこともできる。

本研究では、10名のL2をNSとの交流と学習履歴から、L2の目標言語との接触頻度を「高<--中-->低」の順に並べ、スピーチレベルの習得との関連を分析した。

その結果、主要3スピーチレベルの全てのスピーチレベルの使用が見られたL2は、10名中7名で、接触頻度はいずれも高程度から中程度であった。中程度および低い接触頻度の3名のL2はスピーチレベルの使用が、丁寧体と普通体の2レベルに留まっていた。

主要3スピーチレベル、または、丁寧体と普通体の2レベルの到達の時間的速度は、接触頻度の高いL2のほうが速かった。特に、部活動に積極的に参加しているL2はそうでないL2よりもスピーチレベルの使い分けという社会語用論的能力の発達が進む傾向が見られた。語用論的能力の発達は、接触頻度も関係することが本研究で示唆されたと考えられる。

引用文献

遠山千佳(2005)「中国人学習者の丁寧さ表現の習得:『依頼補助』方略の使用から」『言語文化と日本語教育』お茶の水大学29, 8-14.

遠山千佳(2006)「第二言語社会における丁寧さ・親しさの表現の発達-日本語学習段階による「主依頼」表現の変化から-」『神田外語大学紀要』18, 235-259.

三牧陽子(2013)『ポライトネスの談話分析-初対面コミュニケーションの姿としくみ』くろしお出版

Sawyer, M. (1992) The development of pragmatics in Japanese as a second language: The sentence-final particle *ne*. In G. Kaster (Ed.), *Pragmatics of Japanese as a native and target language*, 83-125, Honolulu, HI: Second Language Teaching and Curriculum Center, University of Hawai'i at Mānoa.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

Fusako Beuckmann (2014) Pragmatic development of Japanese learners: A ten-month's longitudinal study of request, 査読無, *Proceedings of the 16th Conference Pragmatics Society of Japan*, 185-192.

http://pragmatics.gr.jp/?page_id=747

Fusako Beuckmann (2013) The pragmatic development of Japanese learners at the

beginner ' s level: The case of apology, *Assessing " proficiency ": Teachers ' roles in supporting students ' learning, 20-29, August 22-24, 査読無, CAJLE 2013 Proceedings, University of Toronto.*
<http://www.cajle.info/publications/conference-proceedings/cajle2013-proceedings/>

〔学会発表〕(計4件)

Fusako Beuckmann (2015) Acquiring politeness expressions and realizing speech acts in study abroad context: Focus on request, apology, and invitation in Japanese, COSA 2015 Conference on The Culture of Study Abroad for Second Languages, July 14-16, 2015, Saint Mary's University, Halifax, Canada. 審査有

Fusako Beuckmann (2014) Interlanguage pragmatics of Japanese learners: A longitudinal study of request, 17th World Congress of International Association of Applied Linguistics, 10-15 August, 2014, Melbourne, Australia. 審査有

Fusako Beuckmann (2013) Pragmatic development of Japanese learners: A ten-month ' s longitudinal study of request, The 16th Annual Conference of the Pragmatics Society of Japan, December 7-8, 2013, The Pragmatics Society of Japan. 慶応大学三田キャンパス(東京都港区). 審査有.

Fusako Beuckmann (2013) The pragmatic development of Japanese learners at the Beginner ' s level: The case of apology, CAJLE 2013 Annual Conference: Bridging Between Theory and Practice, Canadian Association For Japanese Language Education, August 22-24, 2013, Toronto, Canada. 審査有.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ボイクマン総子(梶本総子)

(BEUCKMANN, Fusako)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号: 50370995